

ノーバディズ・パーフェクト・プログラムの有効性について

吉村 真理子

The Effectiveness of *the Nobody's Perfect Program*

Mariko YOSHIMURA

親同士の交流を円滑にすることによって親の子育てを支援する有効な方策のひとつに、カナダで始められた「ノーバディズ・パーフェクト」(Nobody's Perfect)がある。多民族国家であるカナダで編み出された「ノーバディズ・パーフェクト」の内容および手法は、日本での実施にも十分通用するものと考えられるが、日本でどの程度有効であるかを検証し、より適したやり方に改良する必要があるかを検討することも重要である。そこで、講座最終回に実施するプログラム全体を評価するためのアンケートを分析することによって、ノーバディズ・パーフェクト・プログラムの有効性を探った。その結果、子育てが多様であることを親が受け入れやすくなり、また、同じ立場の親同士が交流する機会を提供するという点で、ノーバディズ・パーフェクト・プログラムが特に効果があることが明らかになった。また、子どもの性別、人数、年齢等によってグルーピングして話し合う機会をプログラムの一部に設けるなどして、より似た立場の親同士で交流したいというニーズに応じていく必要性もうかがえた。

1. 問題と目的

子育て支援の形態は、行政によるもの、家族・親族によるもの、子育てサークル等の同じ立場の親同士の交流によるものなど、さまざまなものがある。核家族化により実際の乳幼児をあまり知らないまま親になることが多い現代の母親にとって、子育てについて共感的に話し合え、理解し合える子育て仲間の有無は、その精神的安定を左右する極めて大きな要因である。親の精神的安定は、子どもとの関わり方に、ひいては子どもの心身の発達に大きな影響を及ぼす。親同士の交流を円滑にすることによって親の子育てを支援する有効な方策のひとつが、「ノーバディズ・パーフェクト」(Nobody's Perfect:「完璧な親なんていない」;以下NPと略す)である。

1-1. NPとは

NPとは、0歳から5歳までの子どもを育てる親のための、学習と支援のプログラムであ

る。1980年代初頭に、カナダ保健省（当時の保健福祉省）とカナダ東海岸4州（ニューブランズウィック、ニューファンドランド、ノバスコシア、プリンスエドワードアイランド）の保健機関が共同開発し、1987年からはカナダ全土に導入されて効果を上げている。プログラムで使用されるテキストは、「親」・「行動」・「心」・「安全」・「からだ」の5冊からなり、後にブリティッシュコロンビア州家族会議が、独自に「父親」を発行している。日本では、2002年にこの6冊が翻訳出版された。

さらに、日本では、2005年にカナダ保健省からの公認を得て、NPO法人こころの子育てインターネット関西（KKI）、子育て研究リソースセンター（KRC）、NPO法人コミュニティ・カウンセリング・センター（CCC）の3団体によって「Nobody's Perfect Japan（通称：NP-Japan）」が立ち上げられた。NP-Japanは、日本におけるNPの質の確保と日本全国への普及のためのセンターとして、ファシリテーターやトレーナーの養成を行っている。

NPプログラムは、約10名のグループを対象として行われるプログラムであり、研修を受けたファシリテーターのもとで、原則として週1回、各回約2時間のグループワーク・セッションを6回から8回実施する。参加費は無料であり、子どもたちの保育が用意されるので参加者は話し合いに集中することができる。

扱うテーマについては、参加者の関心事、気になることや取り上げて欲しいことを出してもらい、それらをKJ法等(注1)で整理して、決定していく。各セッションは、①アイスブレイカー（緊張をほぐすための簡単なゲーム等）、②決まりの確認（参加者がお互いに守ってほしいことを確認し、同意し、約束することで、安全な場を作る）、③テーマの展開（その回のテーマについて話し合い、さまざまなワークを行ったりしながら、互いの知識や体験を出し合って考える）、④お茶とおやつ（グループの緊張をほぐし、参加者がくつろげる休憩時間）、⑤ふりかえり（参加者各自に、その回のセッションで良かったこと、不足だったことを語ってもらい、「学んだことは何か」、「家で実行したいことは何か」についても尋ねる）からなっている。

講座最終回の終了時には、「ノーバディズ・パーフェクト・プログラムに参加されて」というプログラム全体を評価するためのアンケート用紙への記入を求め、ファシリテーターのその後の参考に資することになっている。

（注1）「KJ法」とは、川喜田二郎（東京工業大学名誉教授）がデータをまとめるために考案した手法である。データをカードに記述し、カードをグループごとにまとめて、図解し、まとめていく。KJとは、考案者のイニシャルに因んでいる。共同での作業にもよく用いられ、創造性開発や創造的問題解決に効果があるとされる。

1-2. 目的

日本においてNPプログラムが公式に行われるようになってから、4年が経た。多民族国家であるカナダで編み出されたNPプログラムの内容および手法は、日本での実施にも十分通用するものと期待できるが、客観的な検証は少ない。また、日本人により適した実施方法を模索していく必要があるかを検討することも重要である。そこで、プログラム全体を評価するために講座最終回に実施するアンケートを分析することによって、NPプログラムの有効性を探った。

2. 方法

2-1. 調査方法

2005年から2008年にかけて、千葉県内で開催された9回のNPプログラム（ひとつのプログラムは6回のセッションからなっている）の最終回に、アンケート調査を実施した。開催場所は、千葉県内の公立施設（公民館、コミュニティ・センター、地域福祉センター等）である。プログラムを担当した計10名のファシリテーターは、著者を含めいずれも「NPJ認定ファシリテーター」である。プログラムに参加し、アンケートに回答したのは、0歳から5歳までの未就学児をもつ親88人であった。

2-2. 調査内容

「ノーバディズ・パーフェクト・プログラムに参加されて」というアンケートへの回答を求めた。質問項目は以下の6問であり、自由記述で回答を得た。

1. あなたにとって、もっとも役に立ったのはどのようなことですか？
2. このプログラムに参加されて、考え方や行動で変わったことがありますか？
3. 親として、何か新しい学びや使えることがありましたか？
4. あなたにとって、あまり有効でなかったことは何でしょうか？
5. このプログラムをよりよくするためにどのようにしたら良いと思われますか？
6. お友達にこのプログラムのことを話すとしたら、どのように話しますか？

3. 結果と考察

各質問項目について、自由記述によって回答を求めた。項目1「あなたにとって、もっとも役に立ったのはどのようなことですか？」に対しては、「みんなの意見が聞けて、そのことに一人ひとりが色々な考えでアドバイスをくれた事が良かった」という回答例に見られるように、他者の意見を聞けることが役に立ったとの意見が多い傾向が見られた。この傾向を定量的に解析するために、「意見が」と「聞けて」のような名詞句と動詞句との係り受け関

係がどのような頻度で見られるかを、テキスト分析システム「Mining Assistant / R2」（株式会社ジャストシステム）を用いて分析した。このような「名詞句と動詞句との係り受け」に「名詞句と形容詞句との係り受け」の解析項目を加え、上位10個までの語句と頻度を分析した。

項目1に対する回答に見られる係り受け関係をまとめたのが表1である。名詞句と動詞句との係り受け関係では、たしかに「意見」と「聞く」の頻度が最も高いことがわかった。動詞句「聞く」は、名詞句「意見」以外にも「話」や「人」と対になって使われていることが注目される。また、名詞句「自分」が、動詞句「コントロール」「見つめる」「いれる」に係りながら頻繁に使われていた。動詞句「する」は名詞句「話」と、動詞句「コントロール」が名詞句「自分」「感情」にそれぞれ係っていた。

一方、名詞句と形容詞句との係り受け関係では、形容詞句「色々」が多く用いられ、名詞句「意見」「人」「考え（考え方）」「悩み」「話」などのいろいろな名詞句に係っていることが明らかになった（表1）。

以上の特徴をまとめると、プログラム参加者は、「もっとも役に立ったこと」として、さまざまな事柄における多様性の存在に改めて気づき、いろいろな人の意見や話を聞いたり、話したりすることを挙げていることがわかる。さらに、自分や感情をコントロールし、自分を見つめ、自分自身でいられることなどを受け入れようとしていると考えられる。

表1 「あなたにとって、もっとも役に立ったのはどのようなことですか？」（項目1）に対する回答にみられる係り受け関係

順位	係り受け関係		
	名詞句	形容詞句	頻度
1	意見	色々	2
1	人	色々	2
1	親	完べき	2
4	考え	色々	1
4	考え方	色々	1
4	悩み	色々	1
4	しつけ	よい	1
4	練習	よい	1
4	話し合い	よい	1
4	話	色々	1

順位	係り受け関係		
	名詞句	動詞句	頻度
1	意見	聞く	5
2	話	聞く	3
3	人	聞く	2
4	話	する	2
4	自分	コントロール	2
4	自分	見つめる	2
4	自分	いれる	2
4	感情	コントロール	2
9	次	する	1
9	姿	見る	1

項目2「このプログラムに参加されて、考え方や行動で変わったことがありますか？」に

対する回答の解析結果を表2に示した。頻度がもっとも高いのは、形容詞句「優しい」と名詞句「子ども」との係り受けであった。また、形容詞句「楽しい」が多く使われ、名詞句「子育て」「1日」「子ども」「託児」「気持ち」「食事」と共に使われていることがわかる。形容詞句「よい」が名詞句「自分」「考え方」に係るという回答もみられる。

一方、名詞句「子ども」がこの項目の中でも、あるいは他の項目を含めても高い頻度で使われていた。「子ども」は動詞句「なる」「接する」「なれる」「怒らない」とともに使われていた。これに比べて頻度は下がるが、名詞句「話」が動詞句「する」「聞く」に、名詞句「気持ち」が動詞句「なる」「受け止める」にそれぞれ係っている。

この項目の解析結果より、プログラム参加者は、「考え方や行動で変わったこと」として、子どもに優しくなった、子どもを怒らなくなった、子どもの話を聞くようになった、子どもの気持ちを受け止めるようになった等を挙げていることがわかる。項目1の結果と合わせて考えると、子育てにおける多様性の存在に気づき、自分の状況を受け入れられるようになり、気が楽になったためだと推察できる。その意味でも、「楽しい」という肯定的な形容詞句が、多くの名詞句に係っていることも興味深い。

このような変化には、毎回の講座の最後や最初の振り返りの意義が大きいといえよう。その日のセッションで気づいたことや、前回から今回までの1週間における自分の変化についての気づきを言葉にして表現し合うという作業は、お互いの気づきを促進していく効果があると考えられる。

表2 「このプログラムに参加されて、考え方や行動で変わったことがありますか？」（項目2）に対する回答にみられる係り受け関係

順位	係り受け関係		
	名詞句	形容詞句	頻度
1	子供	優しい	5
2	自分	よい	2
2	子育て	楽しい	2
3	1日	楽しい	1
3	子供	楽しい	1
3	託児	楽しい	1
3	気持ち	楽しい	1
3	考え方	よい	1
3	食事	楽しい	1
3	意見	素直	1

順位	係り受け関係		
	名詞句	動詞句	頻度
1	子供	なる	4
2	気持ち	なる	3
2	子供	接する	3
2	余裕	できる	3
5	子供	なれる	2
5	話	する	2
5	子供	not 怒る	2
5	ゆとり	持つ	2
5	話	聞く	2
5	気持ち	受け止める	2

表3には「親として、何か新しい学びや使えることがありましたか？」に対する回答がまとめられている。形容詞句「色々」が名詞句「方法」「意見」「考え」「情報」「提案」に係って繰り返し使われていた。この特徴は、項目1に対して「色々」が頻繁に使われていたことと共通している。すなわち、「もっとも役に立ったこと」(項目1)、さらに「親として、何か新しい学びや使えること」(項目3)として、共に多様性が強調されており興味深い。子育てには唯一無二の正解はないということがわかったという点は、NPプログラムの特徴といえるかもしれない。受講型のプログラムのように、正解を示されて学ぶのではなく、あくまでも、各参加者自身が持っている子育てについての知識や経験を提供し合い、各参加者は自分の生活に取り入れたいことを持ち帰って行くという形式が効果的であるということを意味していると考えられる。

表3 「親として、何か新しい学びや使えることがありましたか？」(項目3)
に対する回答にみられる係り受け関係

順位	係り受け関係		
	名詞句	形容詞句	頻度
1	方法	色々	2
2	給食	よい	1
2	兄弟姉妹	よい	1
2	親	よい	1
2	こあらっこ	よい	1
2	意見	色々	1
2	考え	色々	1
2	情報	色々	1
2	提案	色々	1
2	2	同じ	1

順位	係り受け関係		
	名詞句	動詞句	頻度
1	子供	なる	3
2	自分	コントロール	3
3	学び	なる	2
3	話	聞く	2
5	気持ち	なる	1
5	大人	なる	1
5	ヒント	なる	1
5	目線	なる	1
5	立場	なる	1
5	あり方	学ぶ	1

項目4として設定した「あなたにとって、あまり有効でなかったことは何でしょうか？」という質問に対する回答では、表4に示したように、目立った係り受け関係がほとんど見られなかった。単純に語句の出現頻度だけを見ると、名詞句「なし」(頻度12)や形容詞句「ない」(頻度19)が多く、「あまり有効でなかったこと」はほとんどないという結果となっている。NPプログラムの有用性が示されているといえよう。

表4 「あなたにとって、あまり有効でなかったことは何でしょうか？」(項目4)
に対する回答にみられる係り受け関係

順位	係り受け関係		
	名詞句	形容詞句	頻度
1	天気	悪い	1
1	冬	悪い	1
1	話	楽しい	1
1	人	色々	1
1	話	色々	1
1	子供	小さい	1
1	上	大きい	1
1	回	有意義	1

順位	係り受け関係		
	名詞句	動詞句	頻度
1	40代	いる	1
1	ママ	いる	1
1	下	いる	1
1	子供	いる	1
1	赤ちゃん	いる	1
1	しかり方	する	1
1	何	する	1
1	人	する	1
1	話	する	1
1	だんな	こぼす	1

項目5「このプログラムをよりよくするために、どのようにしたら良いと思われますか？」に対する回答にみられる係り受け関係を、表5にまとめた。頻度の上位に、名詞句「時間」が形容詞句「長い」「ほしい」「よい」に係る関係と、名詞句「回数」が動詞句「増やす」に係る関係が挙げられている。個々のプログラム参加者の回答をみても、保育可能時間や開催回数等の制約があり時間や回数を増やすことが無理であることに理解を示しながら、1回の開催時間を長くし開催回数も増やしてほしいといった希望を挙げている。

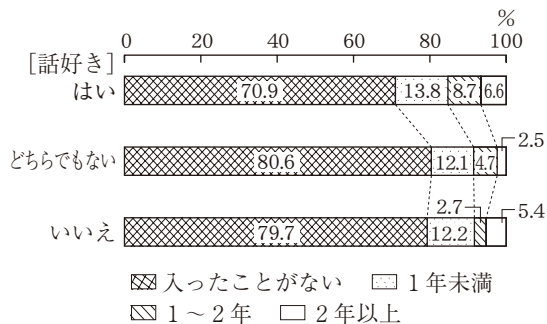
また、名詞句「年齢別」が動詞句「分ける」に係っている例があり、子どもの年齢別に分かれて話したいといった希望も出ていた点は考慮に値する。それは、年齢別での開催は、幼児や児童を持つ先輩ママと乳児のみを持つ後輩ママとが既に持っているリソース（知識・体験）を分かち合う場であるというNPプログラムの趣旨と方向性を異にするからである。NPプログラムの趣旨については十分理解していることと思われるが、先輩ママが後輩ママにアドバイスすることで役に立てたという自己肯定感をもったというような記述はほとんどなかった。多かった記述は、自分の話を最後までしっかり受け止めてもらえたという満足感についてのものであった。

NPプログラムの目標のひとつは、約6週間の受講期間中にプログラム終了後も地域で支え合う関係を作ることである。そのため、講座修了時に、参加者の同意を得て、携帯メールアドレス等の連絡先の名簿を作成し、配付している。その後、参加者同士で自主的に連絡を取り合ったり、参加者同士で新たな子育てサークルを作ったりするなど、公立施設等の協力を得ながら、講座修了後の参加者のつながりをサポートする態勢があれば、より効果的な講

座になると考える。

育児サークルへの参加のしやすさに関して、2003年に実施された子育ての調査をもとにした原田正文による「兵庫レポート」（「子育ての変貌と次世代育成支援」2006年）に興味深い結果が報告されている。調査対象は、兵庫県H市で行われた乳幼児健診を受診した約1,600人から2,300人（健診によって異なる）である。3つの設問「育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのは好きですか?」、「育児サークルに参加したことがありますか?」および「育児サークルへの参加期間は?」への回答をクロス集計した結果が報告されている（図1）。そこでは、「話し好き」な母親と「話し好きではない」母親とで、サークル加入率について χ^2 検定をしてみると、有意差は見られないという。これは少し意外な結果であるが、育児サークルへの参加は、場所と時間が決まっており、自発的に他者に働きかけて参加の約束を取り付ける必要がないため、人付き合いが苦手な母親も参加しやすいのであろう。

図1



「育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのは好きですか」と「育児サークルに参加したことがありますか」とのクロス集計結果（3歳児健診時）

原田正文（2006）pp.107

表5 「このプログラムをよりよくするために、どのようにしたら良いと思われますか？」(項目5)
に対する回答にみられる係り受け関係

順位	係り受け関係		
	名詞句	形容詞句	頻度
1	時間	長い	6
2	時間	ほしい	3
3	時間	よい	2
4	スタイル	よい	1
4	不定期	よい	1
4	雰囲気	よい	1
4	機会	よい	1
4	少人数	よい	1
4	話し合い	ほしい	1
4	お話	色々	1

順位	係り受け関係		
	名詞句	動詞句	頻度
1	回数	増やす	3
2	人	知る	2
2	年齢別	分ける	2
2	余裕	持つ	2
2	時間	とれる	2
6	子供	話す	1
6	自分	話す	1
6	気持ち	話す	1
6	何人	いる	1
6	子供	いる	1

「お友達にこのプログラムのことを話すとしたら、どのように話しますか？」という設問に対する回答においては、形容詞句としては「よい」が頻出し、名詞句「プログラム」「機会」「リフレッシュ」「場所」「人」「託児代」「子育て」に係っていることが分かった(表6)。形容詞句「楽」が名詞句「気持ち」に、形容詞句「新しい」が名詞句「世界」に、形容詞句「楽しい」が名詞句「育児プログラム」にそれぞれ係っていることがわかるが、いずれも肯定的なものの見方を表している。

一方、動詞句の係り受けで見ると、上位の頻度として「できる」が挙がっており、名詞句「話」「自分」「お友だち」に係っている。出現頻度は高くないが、動詞句「話す」は「思い」「友だち」「プログラム」「講座」などのさまざまな名詞句に係っていることが分かった。

この項目に対する回答では、「NPプログラムに参加すると、気持ちが楽になる」や「新しい世界が開ける」というような変化が期待できるという記述が特徴的であった。係り受けの解析から見ても、「よい」という形容詞句が上記のようなさまざまな名詞句に係っていることから、NPプログラムがかなり好評であったことがわかる。

現代の女性の多くは、結婚し出産するまでは男性と同じように勉強し、学生生活や社会人生活を送ってきている。ところが専業主婦になると、四六時中自分が拘束され、したいことが自由にできなくなる。この傾向は出産をすると特に強くなる。したがって、出産の喜びを感じる一方、子どもと離れる時間を持ちたいという欲求を持つのは、ごく当然のものと考えられる。しかし、乳児を他者に預けることにかかなりの罪悪感を持つ母親が多い。

前述の通り，NPプログラムでは，子どもたちの保育が用意され，参加者は話し合いに集中することができる。ただし，どこまで集中できるかは保育の質に非常に左右される。最初は，母親と離れる際，ほとんどの子どもが泣く。しかし，保育を担当する保育者が，母親が一個人としての自分を取り戻す時間を持つことは大事であるという雰囲気を醸し出していると，母親は子どもと安心して離れることができるようになる。また，「ここでの話はここだけのものにする」，「人の話を否定しない」，「人の話は最後まで聞く」といったような約束を取り交わすことにより，参加者の間で信頼関係が形成されやすくなっていると考えられる。NPプログラムは，信頼できる仲間と話をする時間と空間を提供する大切な役割をもつものと言える。

表6 「お友達にこのプログラムのことを話すとしたら，どのように話しますか？」（項目6）に対する回答にみられる係り受け関係

順位	係り受け関係		
	名詞句	形容詞句	頻度
1	プログラム	よい	3
2	気持ち	楽	3
3	機会	よい	2
3	世界	新しい	2
5	リフレッシュ	よい	1
5	場所	よい	1
5	人	よい	1
5	託児代	よい	1
5	子育て	よい	1
5	育児プログラム	楽しい	1

順位	係り受け関係		
	名詞句	動詞句	頻度
1	話	できる	3
2	考え方	変わる	2
2	自分	できる	2
2	時間	持つ	2
2	参加	すすめる	2
2	お友だち	できる	2
7	思い	話す	1
7	友だち	話す	1
7	プログラム	話す	1
7	講座	話す	1

4. まとめと今後の課題

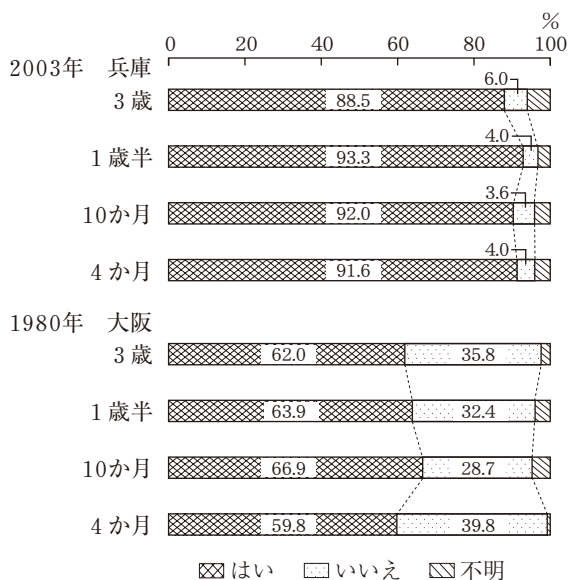
「もっとも役に立ったこと」（項目1），「考え方や行動で変わったこと」（項目2），さらに「親として，何か新しい学びや使えること」（項目3）として，共に多様性の存在が尊重されている点が興味深い。各参加者自身が持っている子育てについての知識や経験を提供し合い，そして各参加者は自分の生活に取り入れたいことを持ち帰っていくというNPの形式が効果的であることを意味していると考えられる。「子育てには，これだけという正解はなく，みんなそれぞれでいいのだ」とはよく言われることであるが，話し，聞くという作業を通してまさしくこのことが実感できるということが，NPプログラムの有意義な点であるといえる。

また、「あまり有効でなかったこと」（項目4）はほとんど挙げられず、「プログラムをよりよくするためにしたら良いこと」（項目5）としては、1回の開催時間を長くし開催回数も増やしてほしいといった積極的な希望が挙がっていた。さらに、「お友達にこのプログラムのことを話すとしたら、どのように話すか？」（項目6）という設問に対しては、「NPプログラムに参加すると、気持ちが楽になる」や「新しい世界が開ける」というような肯定的な変化が期待できるというような記述が特徴的であった。これらはNPプログラムの有用性を示しているといえよう。

ただし、項目5において、一部の人が子どもの年齢別での開催を希望していたという点は、注目に値する。各参加者自身が持っている子育てについての知識や経験を提供し合うというNPプログラムの趣旨からしても、グループは多様な年齢の子どもを持つ親から構成されることが望ましい。しかし、乳児のみを持つ母親が、幼児や児童を持つ母親の話の中から自分に合った知識や経験を取り入れるということよりも、より近い立場の者同士が困っていること等を率直に話し合い、情報交換することに意義を感じる人もいるようである。より均質であることに融和性を感じる日本人の国民性の現れともいえる。このようなニーズに応えるには、プログラムの一部において、子どもの性別の違いや、子どもの人数の違い（1人、2名以上）、子どもの年齢による違い（0～1歳、2歳、3～5歳）等によってグルーピングして話し合う機会を設けることが、有効かもしれない。もちろん、後で、グループ全体としてシェアリングしていくことが必要である。

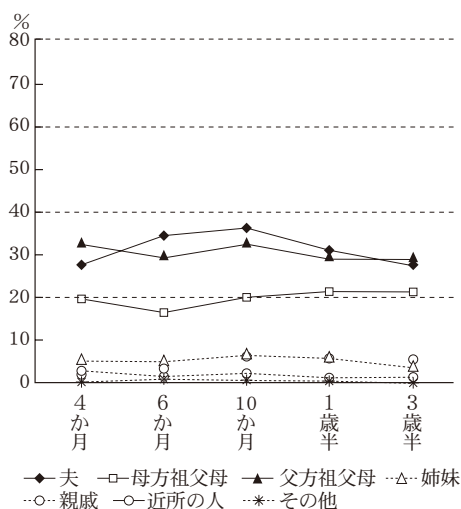
子育てをするうえでは、上記のように、同じ境遇の母親同士のつながりが必要とされていることが本調査からも明らかになった。子育てに対するサポートが得られているかという点に関して、注目される調査がある。1980年に大阪府下のA市に生まれた全数児約2,000人を対象に行われた子育て実態調査、いわゆる「大阪レポート」がある。前出の「兵庫レポート」では「大阪レポート」の結果と比較検討しているが、図2は、「育児の手伝いをしてくださる方はありますか」という質問に対する回答をまとめた図である。大阪レポート（1980年）では、「育児の手伝い」が「ある」が65%、「ない」が35%である。ところが、兵庫レポート（2003年）では、逆に「ある」が多く95.4%、「ない」は4.6%にすぎない。20数年前は、「育児の手伝いがない」と答える母親が約3人に1人はいたが、最近では、約20人に1人に減ったということである。これは意外な結果である。

図2 育児の手伝いをしてくださる方はいですか 原田正文 (2006) pp.92

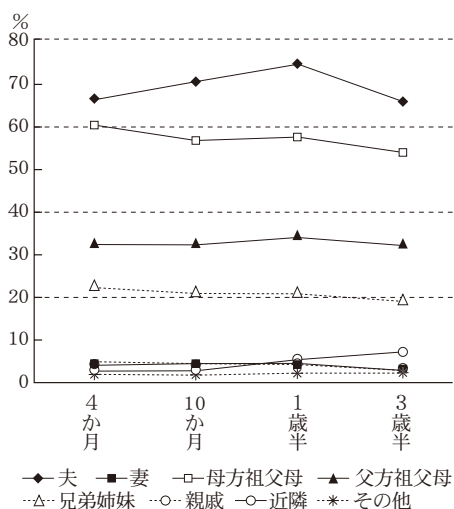


それでは誰が手伝いをするのであろうか。「育児の手伝いをしてくれる人」の内訳を示したものが図3である。夫の比率は、大阪レポートでは30～37%であったが、兵庫レポートでは66～74%と、約2倍に増加している。次に大きく変化しているのは「母方祖父母」である。大阪レポートでは、20%前後でしかなかったものが、兵庫レポートでは53～60%へと3倍近くに増加している。一方、「近所の人・近隣」や「その他」による子育て支援は、依然として低調である。

図3 育児の手伝いの内訳 原田正文 (2007) pp.93



(a) 「大阪レポート」



(b) 「兵庫レポート」

父親にも母親と平等な親意識を持ってもらうことはもちろん必要であるし、いざというときに、気兼ねのいらない肉親のサポートはありがたいものである。しかし、価値観が急速に変化している日本の社会では、前述の通り子育て真最中の当事者同士のまさに「近所の人・近隣」というサポート体勢を自主的に整備していくことが重要である。その素地作りとして、NP講座は、その可能性が大いに期待できるものであると考える。

〈引用文献〉

- ・ 原田正文 2006 子育て支援の変貌と次世代育成支援～兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防～ pp.92－93, pp.107 名古屋大学出版会

〈参考文献〉

- ・ 服部祥子・原田正文 1991 乳幼児の心身発達と環境～大阪レポートと精神医学的視点～ 名古屋大学出版会
- ・ 原田正文 2006 子育て支援の変貌と次世代育成支援～兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防～ 名古屋大学出版会
- ・ 伊志嶺美津子（編） 2002 父親 ドメス出版
- ・ 特定非営利活動法人子ども家庭リソースセンター（編） 2002 からだ・安全・心・行動・親 ドメス出版
- ・ 特定非営利活動法人子ども家庭リソースセンター（編） 2003 Nobody's Perfect 活用の手引き ドメス出版
- ・ 特定非営利活動法人子ども家庭リソースセンター 2008 ノーバディズ・パーフェクト ファシリテーター・ガイド
- ・ 山野則子・板野美紀・小野セレスタ摩耶・川島ゆり子・酒井佐枝子・橋本真希 2007 茨木市子育て支援システム策定のための研究事業報告書 山野研究室

謝辞

アンケート調査のとりまとめにご協力いただいた斉藤まり子さん、伊藤雅子さん（NPO法人 親そだちネットワーク ビジー・ビー）、古賀千恵子さん、論文作成にあたりご助言いただいたノーバディズ・パーフェクト・ジャパン副代表、浦和大学子ども学部教授、伊志嶺美津子先生、ほか調査にご協力くださった方々に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。